

淺妻舟

大佛次郎

浅 妻 舟

昭和三十八年十月十五日 印刷
昭和三十八年十月二十日 発行

定価 二八〇円

著者 大佛次郎
発行者 豊島清史
印刷者 菅生定祥

発行所

株式会社

光風社

東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話東京例〇二三八番
振替東京五六五二六番

落丁・乱丁は挿取替いたします。

浅 妻 舟

大 佛 次 郎

目 次

梅の宵
雲の影
女だけの国
花ぐもり
おぼろ夜
夕立
野分
菊日和
夜の人

一三
一五
一三
八四
七
五
四
二
七

月
明
り

白
梅
紅
梅

吉
原
雀

花
吹
雪

軒
漏
月

夏
の
露

ほ
た
る
籠

投
網

黒
汐

一
五

一
八

一
六

二
四

二
五

二
六

二
九

三
〇

三
〇

裝
幀

佐
多
芳
郎

梅の宵

「そうか」

と、暗い中で、武士は、うなずいて見せて、何か思案する様子で、黙つて、突立っている。

牛込御門の外で、濠ほりをへだてて、土手の松の木が、黒々と列つらなっているのが見上げられた。日あしは伸びて、すこし前までは、あたりは明るかつたのだが、いつの間にか暮れて来て、提灯たいとうをさげた通行人を、ちらほらと見掛けたのである。

「八つ頃だつて？」

「へえ、そうだそうです」

と答えて、

「立派なお駕籠かじで、……御用人らしい年配の御武家が送つて来たつて、……申しませんが」

武士の方は、また考え込んだように沈黙したが、次いで、言葉より先に歩き出しながら、

「とにかく、おれも屋敷だけは見て置こう。外を通るだけが、案内してくれ」

畏かしこまりました、と答える代りに、小腰を屈かがめて自分も歩き出した。牛込では顔の売れた御用聞きで、治助と言
うのだが、四十がらみの落着いた物腰の男であつた。

「夜が暖くなつたなあ」

「へえ、……寒になりました」

「……………」

「もう、どこでも梅が満開で御座います」

話声とともに、ふたりが入つたのは、外濠に向つた武家町の間まの暗く細い道であつた。そう言えば、ここでも、歩いてゐる内に、どこからか梅が香かがつたわつて来るようである。

「今度の話だが……」

「へえ」

治助は、武士の顔を見て、次を待つた。八丁堀の同心の尾形計十郎と言う男で、顔は以前から知つてゐるが、治助とは直接関係のある火附盗賊改めの役ではなく、定廻じやうまわりに出たのを見たこともない。何のかがりをしてゐるのか、呼び出されたのは今夜が初めてで、話振りも治助が懇意こんいの同心たちとは違つて、品もあるし、慎重なように感じられた。

「内々の話だが、御奉行から、じかに出たことだから、手前も、そのつもりで、充分、ていねいにやつて欲しいのだ」

「充分、気をつけますが……」

同心は、闇の中で笑つたようである。

「ただ、そのお女中の宿下りの間を、見はるだけのことで、二日か三日の内だろうが、……粗相でもあると面倒だ」

「……………」

「これは、おれからも頼んでおく」

屋敷町の夜は、この宵の口から、しんとしている。
すこし歩いてからであつた。

「旦那」

と、治助が、ひくい声で注意した。

「その、……右手の三軒目の、長屋門のあるお屋敷で」

同心の男も、ちらと目を走らして見まもつて、白い顎あごをひいて、うなずいて見せた。無言である。

ふたりとも、足音も立てぬくらいに静かに、その屋敷の門前を通り過ぎた。

屋敷の主は、本多主殿とよぬまと言つて、三河以来の家柄だが、貧乏な方でも知られていると聞かされて来た。夜目に見ても長屋門の壁は落ちていたし、その先の黒板塀の破れ目からは、内部の笹の葉がのぞいて見えた。

「気の荒い殿さままだそうでございます」

と、治助が知らせたのに、

「静かだな」

と、同心の方は、塀越しに、内部の様子に耳を傾けていたらしい。

あかりまでは見えないのは当然としても、庭の中に、まだ冬の冷たい闇が残っているように、ひっそりいるのが感じられた。北向の家の蔭には雪でも残つていそうである。また道を戻つて、門の前を通つて帰るだけのことであつた。

長屋の窓にも、あかりは見えない。

「では、頼んだぜ」

と同心は言つた。

「おれも、朝晩一度は、様子を聞きに廻つて来るつもりだが、一切、おぬしの働きに、おぶさる話だ」

「左様でございますと、……宿さがりのお女中が、どこへ出かけたかを、お知らせすればよろしいのでございますね」

「ほかにも何か聞き込んだことがあつたら、一々、おれの耳に入れてくれ。ただ、さつきも断つたとおり、如才なくやつてくれよ」

「へえ」

「相手が御直参ごじまかんの屋敷。町方には、もともと善手よかてと知れてる上に、……その女中が、お側用人の柳沢出羽守様のお奥に奉公している、とあつては、面倒なのは知れたことだ」

「気をつけることで、ございます」

また、もとの濠端ほりばたの道に出てから、同心が別れて帰る時が来たようである。

「旦那」

と、治助が、知らせた。

「そのの自身番の老爺おやじが、古い懇意でもございますし、目をかけてやつておりますので、手前の言うことなら、いつも、まめに働いてくれます。手前も、あしたからは、あの小屋に一日、張込んでおるつもりですが、急なお話がありましたら、どうぞ、あちらへおいで下されば、わかりますから」

その番屋の番人の老爺であつた。治助が同心の男を送つて、別れて来ると、副業の蠟燭ろうそくや草履を並べた家の中から立ち上つて来て、

「なんですか、親分。何か、ありましたか」

と、物見高く、目を光らせて迎えた。

「今のは、八丁堀の旦那衆ですね」

治助は、取り合わず、

「一服させて貰おう。とつつあん」

「さあさあ」

と、迎い入れて、

「今晚は、暖けえので、あいにくと、火鉢の火を、ねむらせてしまつたが、火種が残つてるかね」
番屋のおやじは、蒸茶を入れて来て、治助に出した。

「湯がぬるいんで」

「ああ、かまわないでくれ。どうせ、これから二三日、迷惑だろうが、お前んとこへ邪魔をするのだ」

「へえ、どうぞ」

と小腰を屈めて神妙に見せたが、町内も、すぐ近くの屋敷のことなので、治助が手下でなく自分で張り込んで、様子をさぐるとは、どんな話なのか聞き出したい。

待つていたものの、治助が暗い外の往来を見ながら、黙り込んでいるので、

「左様ですか」

と、ひとりで合点したように、

「お女中に上つているとは聞きましたが、柳沢様のお屋敷へ出ておいでとは、初めて承りました」

この誘いの水に掛つたわけでもなく、治助は自分の胸の中に動いていた思案を、ほつりと漏らした。

「三河以来のお旗本で、気の荒いひとだと言う話だつたが、……やはり当世だな」

「へ？」

「いや」

と、影のように薄く笑つて、

「そうだろう？ 大きな声では言えないが、公方様お気に入りの柳沢様の首の振りよう一つで、大名だろうが

旗本だろうが、家が傾しくか起るか決るつて、噂は、いろいろとあるからな。娘をあちらに行儀見習に出して置けば、悪いことは起らねえ筈だろう」

「親方」

と、おやじが膝を進めて、言い出した。

「それが、あちら、……本多様のは、ほんとうのお嬢さまではございませんぜ」

「どう言うのだ？」

「それア、もう、私らでさえ見とれるくらいに、おきれいな方ですが、……ほんとうは、日本橋の方の町家の育ちで、本多様が、親もとに成つて、御奉公にお出しになつたとやら、そんな風に伺つておりますが……」

治助は急に注意深い顔色になつて、番太を見た。

「その話は確かか？」

「ごきりようを見て、お屋敷へお引取りに成つた。……なアに、私のも御近所の御中間衆おちゆうげんしゆうの話を、受売りでお耳に入れたわけですが、……とにかく、年頃だし、みがき込んだように、きれいな方だ。お出かけたと聞くと、この辺の若えのが一度に、家ん中から駆け出して見に出たもので」

「……………」

「どこかへ、お女中に上つた。もう、あちらにはおいでないと判つて、がっかりして当座は寝込んだ奴ぐらい、ありましたでしょう」

「いよいよ、貧乏旗本が、骨を折つて、出世の道具に持ち出したものよ。どこでも、せり合だと聞いたものが、……そうか、日本橋あたりの町屋裏から掘り出して来たのか」

治助は、したり顔を向けた。

治助は、二服目のきせるを火鉢の火にあてたところであつた。

離れたところで、けたたましく泣く犬の悲鳴が聞こえて、番屋の老人を、ぎよつとさせた。

「どいつだ、また！」

と、急に立ち上つて見に出て行こうとする。

「大丈夫だ。とつきん」

と、治助が笑つて、

「犬なら今、そこを突つ走つて、逃げて行つた」

「いや、ちよつと見てまいます。……仕様がねえ。知つてて、わるさをしやがつて。お犬目付にでも見つかつたら、どうしやがるのだ」

そそくさと、草履をひつかけて、外まで出て、あたりを見廻している。人も犬も、姿は見えなかつた。

生類憐愍の布令が出てから、十年あまりに成つていた。將軍と言う権力ある地位の人から言い出されたことだが、これほど江戸の市民の迷惑になつた法令はない。犬を殺した人間は、島流しになる。自分がしたのでなくとも、自分の家の前に犬の死骸が見つかるようなことがあつたら、役人が来て調べるやら、面倒なことが無限に続くのだ。犬を虐めた現行犯は、もとより繩を打つて牢屋へ送られるのである。それもただ將軍綱吉が、戌年生れのせいから出たことなのである。

番屋のおやじは、戸口まで戻つて来てからも、まだ心配になるらしく、立つて外を見ていた。

「どこから、まぐれ込みアがつたか？」

と、半分は、治助に聞かせて、つぶやいた。

「お犬目付に頼んで、早く中野のお犬小屋へ送つて貰いてえと思つてるんですが、昼間はどこかの屋敷の庭か縁の下に隠れてると見えて、……迷惑してるんですよ」

「いいよ。おれからも話しといてやるから」

おやじは、まだ外を睨んで、小屋の中に戻つて来なかつた。提灯をつけて、駕籠が通つて行くのが、治助にも見えた。

「おや」

と、おやじの言う声があったが、急に、治助を振り向いて、知らせた。

「本多様へ、駕籠の迎いが行きますぜ。どなたか、お出かけに成るんでしょうか？」

「間違いないか」

「ええ、あちらの屋敷のお中間が附いてますから、あちらへ伺うのでしよう」

治助は、手ばやく煙管筒きせろつづをしまつて、腰にさしながら、降りて来た。

「ちよつと、行つて見て来る」

「お氣をつけになつて」

駕籠は、本多主殿の長屋門の前にとまつて、人が出て来るのを待つていた。

治助が隠れて見ていると、やがて、小門があいて、駕籠の陸尺りくしゃくが向けた提灯の光の中に、夜の闇の中にも詮詮のような若い女の姿が浮き上るように出て来た。

堀も門も重々しく、人の話声さえ外に聞こえない山の手の屋敷町から、下町の町家の中に出て来ると、夜もまた、はなやかである。

「その角のところ、おろしてください」

と、駕籠の中から、お勝は言つた。

「こちらで、よろしいんですか？」

「ああ、そう」

降りて、立つと、町なかの川の水の匂いが夜気にただよっている。

「御苦労さま」

と、うつかり、町言葉が出てしまったのも自分が育つた下町に帰つて来たせいらしい。

仕度して包んで置いた酒手を渡してやると、駕籠かきは現金に幾度も腰を屈めて礼を言つてから、空になつた駕籠を軽そうにかついで帰つて行く。

お勝は、なつかしく、あたりの家並を見まわした。まだ、店をあけている家もあれば、どちらを向いても提灯をさげて人が歩いてゐる。

下駄の音まで地面に明るい。

自分が育つた叔母の家は、もう少し先の路地裏になつてゐるが、わざと、お勝がこの呉服町で降りたのは理由がある。急に、足早く歩き出した。それだつて町むすめの軽い足取りなのである。

半年振りの宿さがりだが、見覚えのある家ばかりの町である。質屋の土蔵が立つてゐる辻を横に入つて、稲荷の前を通る時に立ち止つて、拜んだ。

「どうぞ、いてくれますように」

と、祈る心持は、歩き出してからあとで、気がついた。早く、そう願えばよかつたのだ。

入口は格子戸で、小さく板塀をめぐらした二階家その先にある。

しもた屋風の小さい家だが、江戸では有名な画家、多賀朝湖の住居である。(後に、英一蝶と名を改めたが、この時分は、まだ多賀朝湖と名乗つてゐた。)

格子の中の障子に、あかりがさしている。お勝は、髪に手をやりながら、動悸している胸が落着くように、立ち止つた。家の中では人声もなく静かな気配である。